
レオンの『960年聖書』における「パウロの肖像」をめぐって

スペイン北部の旧都レオンのサン・イシドーロ王立参事会聖堂に所蔵（Cod. 2）される960年の年記を持つ聖書写本（以下『960年聖書』）は、120点の挿絵を含む一巻本聖書である。挿絵の多くは旧約聖書に付され、新約聖書にはパウロ書簡冒頭に4点の人物像（ff. 459v, 465v, 470v, 471）が配されているのみである。本発表はこの人物像に着目し、図像の意味と配置された目的を写本全体の挿絵とテキストから考察するものである。

先行研究において、これらの人物像は、パウロ書簡の冒頭に配されているために「パウロの肖像」と同定され、主にコラム間に描かれているため、イニシャルの一部か、単なる余白装飾と見なされていた。描かれた理由としては、写本の制作地と推定される修道院がペテロとパウロに捧げられていること以外に、積極的な説明がなされることはなかった。しかし、パウロ書簡の配置や冒頭の一覧表、さらに各肖像の描写を再検討すると、これらが一巻本聖書の構成において意味のある配置であったことが想定されるのである。

『960年聖書』のパウロ書簡は、ウルガタ訳聖書の通例に反し、四福音書の後、本来なら使徒行伝が配されるべき箇所に置かれている。これは周辺写本に見られない特徴であり、同写本の目次（f. 4）とも順番を異にするため、写本の制作段階で配置の変更が行われた可能性が指摘される。さらに書簡の直前には、5フォリオに渡ってパウロによる14書簡の共通箇所一覧表 *canons epistolarum* が配されている（ff. 456-458）。加えて、肖像が置かれた「ローマの信徒への手紙」、「コリントの信徒への手紙一、二」、「ガラテヤの信徒への手紙」は、予型論に代表される旧約の律法と新約聖書を結び付けるパウロの神学的解釈を多く含み、旧約聖書の引用が集中している書簡である。

4 肖像の描写はそれぞれ異なるが、伝道の杖を持ち、杯を掲げる動作は、同写本の他の挿絵や書簡の内容と呼応する。例えば、杯を掲げる動作は目次や巻末の著者像（フロレンティウスなど）とも共通し、「神を賛美する賛美の杯」（一コリ 10:16）以下に対応する。杖を頭上に掲げる動作はイスラエルの人々を導く出エジプト記のモーセ（ff. 39, 41）と類似する。パウロとモーセは白髪で描かれることがあるが、両者を対応させる描写は、カロリング朝の一巻本聖書扉絵においても前例があるほか、『960年聖書』冒頭の「マイエスタス・ドミニ（f. 2）」の、「日の老いたる者」（黙 19:4, ダニ 7:13-14）に似せた白髪のキリスト像とも共通する。同写本には冒頭挿絵をはじめ、新約聖書と旧約聖書を統合させる工夫が各所に見出せるが、これらのパウロの肖像もまた、旧約聖書と関わりの深い4書簡において、両聖書を統べる書簡の著者像として配された可能性があることを新知見として提示したい。